



←これが実寸大の3～4年ものです  
寒冷地ではここまで10年かかります

佐鳴湖で絶えてしまったシジミ、その復活を目指して古代の巨大湖「東海湖」の対岸にいたシジミの末裔木曾川シジミを導入しました。我々は佐鳴湖シジミを中国から再導入されたトキになぞられました。

"浜松のトキ"、

佐鳴湖シジミを復活させよう！

かつて、シジミがいたことを知っていますか？

蜆塚遺跡の貝殻の9割以上がヤマトシジミです。3000年位前の海面が高かった時代に、縄文人が採って食べたと推定されますが、遺跡にあるものは現在みなさんが見慣れたものと比べて格段に大きいことに気づきます。現在育成してみると、佐鳴湖では約3年で同じくらいの大きさになりました。縄文人は豊富な資源の中から大きなものだけを選んで採っていたことがわかります。また、40年くらい前まで佐鳴湖沿岸では住民がシジミを「おかず」として採っていましたが今は絶滅してしまいました。昔のきれいな佐鳴湖、シジミのいた佐鳴湖、より健全な環境の佐鳴湖を目指して我々は活動しています。

佐鳴湖生まれの5世代目が育っています



H23 発生の当歳もの（ほぼすべてシジミ、○は10円玉）



H22 発生の3年もの（青いものはペットボトルキャップ）

一緒に活動しませんか

H20年度に木曾川水系から親のヤマトシジミを再導入し、人の手をかけながら増殖試験、育成試験などを行っています。親貝の導入は初年度のみで、その後は毎年種苗生産に成功し佐鳴湖の中でも生存、生育、繁殖することがわかってきました。これは、地域ぐるみで佐鳴湖の環境を改善してきて、水質がずいぶんよくなった結果可能になったことですが、まだまだ佐鳴湖のすべての場所でうまく生息できるわけではありません。H24年度は、佐鳴湖の中でも繁殖が確認され、明るい兆しが見えてきました。佐鳴湖を体験し、佐鳴湖を知らなければ佐鳴湖を語り、よくすることはできません。皆さんもその一つとして我々の活動に参加してみませんか？



佐鳴台小の総合学習として観察実験を開催（H24）

ヤマトシジミ (*Corbicula japonica*) は、日本の汽水域に生息する二枚貝で、みそ汁の具などとして食されてきました。かつては全国の汽水域に広くいましたが、霞ヶ浦や八郎潟、長良川の淡水化や沿岸の開発により資源は急速に減少しています。国内主産地は、北海道、青森、島根、愛知などです。

佐鳴湖シジミプロジェクト協議会

連絡先：中区城北3-5-1 静岡大学工学部 戸田

電話 053-478-1146 メール tmtoda@ipc.shizuoka.ac.jp

事務局：中区佐鳴台2-23-27 竹内良訓事務所

電話 053-440-8100